

Sumantra Bose,

*Kashmir : Roots of Conflict,
Paths to Peace.*

Cambridge, Mass.: Harvard University Press,
2003, x+307pp.

いの うえ
井 上 あ え か

は じ め に

カシミール問題をインド・パキスタン分離独立の時に解消できなかった矛盾の表出であると考えながら、それは両国間の長い対立の歴史そのものの現象化であり継続であるということが出来る。しかしこの問題は、解決されずに経過した60年の間に、いくつかの要因を新たに抱え込むことによって複雑さを増した。新たな要因とは例えば、インド政府によるカシミールの統合・民主化の失敗、カシミール人自身による独立運動の展開、そして1989年以降の武装勢力によるゲリラ戦の開始等があげられよう。とくに1989年以降の展開は、カシミールの一般住民の犠牲を爆発的に増加させた。人権団体やパキスタン政府の推計値によれば、1989～2002年の累計で、死者は8万人をこえ、孤児は10万人に上る^(注1)。さらに2001年9月11日以降はカシミール紛争が国際化されたといわれるが、それは問題解決のために国際社会の仲介を期待するカシミールの住民にとって積極的な意味をもつ反面、1930年代以来70年余り続いてきたカシミール人の主権をめぐる運動が、単に越境テロの問題として矮小化される危険をもたらすものであった。

カシミールにかんする研究は、こうした状況を反映して様々な角度からのアプローチがこころみられてきた。近年はとくに両国が核技術をもつことが公然化したことから、安全保障とのかかわりに注目した研究や、1990年代後半以降のイスラーム過激派の

動きに連動してカシミールに活動拠点をもちようになったとみられる武装勢力の動きに注目した研究が目立っている [Stern 2000 ; Harrison 2001 など]。こうした研究は、いずれも古くて新しいカシミール問題の性格を端的に象徴し、問題解決の難しさを改めて認識させるものといえるだろう。

こうしたなかで、本書はむしろきわめてオーソドックスに、この問題の起源から語りおこし、とくにインドとの関係でカシミールがいかに戦場となり、問題がこじれていったのか、そして現実的にどのような解決への可能性があり得るのかを、専門家以外の読者にもわかりやすく解説した研究と考えられる。

I 本書の内容

本書の構成は以下とおりである。

序

第1章 紛争の起源

第2章 カシミール・インド関係の瓦解

第3章 カシミールにおける戦争

第4章 紛争における主権

第5章 平和への道筋

第1章では、カシミール問題の起源が論じられる。1947年8月に始まった脱植民地の過程は計画されたようには達成されなかった。少なくともインド側カシミールにおいて、この失敗は一時的にカシミールの事実上の自治という状態を生み出した。ところがその後になって、インドは政治的な策略によって、一度は与えた自治を奪い、カシミールの主権を剥奪した。この経緯こそが、カシミールとインドの関係をこじらせる遠因になっていると著者は述べる。

つづく第2章では、著者はインドによる統治がカシミールに及ぼした影響に注目し、インドがいかにカシミールに民主主義を確立することに失敗したかが検討課題とされる。1940年代には J・ネルー政権はカシミールに対して寛容な態度をとりながら、50年代に入って明確な意識をもってカシミールの自治に介入することとなる。著者はインド側カシミールの歴史においては、ごく形式的な最小限度の民主政

治さえ実現されてこなかった、と論じる。普通選挙制度や政治参加の形態も欠いたままで、強制的な「統合」を押し進めたことによって、インドのエリートたちが恐れた分離主義がむしろ現実のものになってしまった、と著者は断言している。

第3章では、前章までを受けてカシミールにおける戦争について、結論的に3つの点を指摘する。第1に、カシミール問題は一義的にはインド政府の政策の結果にほかならないということ、これに加えてパキスタンもまた悪意ある役割を果たした、ということである。第2は、インド側カシミールの社会と政治はさきわめて複雑な実態をもっており、一概に「自決」(self-determination)といってもその内容は分裂している、という点である。そして第3に、国内状況、国際状況ともに、カシミールの紛争をめぐる要因が今や解きほぐしがたく混乱している、ということである。パキスタン政府にとって管理ライン(LoC)を越えて移動するカシミール人を取り締まることは、地理的、経費的な問題に加えて、パキスタン国民がカシミール人への強い共感をもっているために、困難である。一方で、パキスタン政府は人道的にインド側からの難民を受け入れ、保護し援助することが期待されてもいる。著者は言及していないが、その場合、いわば不法に越境してきた人々をパキスタン政府が公的に支援することで、パキスタンの脆弱な社会福祉制度が圧迫されるという面も無視できないだろう。

さて、第4章では、本書の核心ともいえる議論が展開される。著者は、現時点で、カシミールの人々はいうまでもなく、インドとパキスタンにとっても、最も望まないのは戦争であるとしたうえで、しばしば安易に議論される分離独立と住民投票は、いずれも問題解決の方法ではない、と断じる。さらに、ボスニア・ヘルツェゴヴィナおよび北アイルランドにおける紛争との比較を交えて議論を展開する。そして、必要とされているのは、カシミールに住む人々の複合的なナショナル・アイデンティティを尊重し、それに加えて両国のエリートが最も重視する自国の主権と領土的統一という課題にも配慮した政治的解決にほかならない、とする。

これを受けて、第5章ではいくつかの「和平への道」が提案される。そこには、インド・パキスタン両政府に持続的な協力体制の確立や、インド政府とカシミールとの間の調和的な関係の構築、さらにはアーザード・ジャンムー・カシミール(AJK, パキスタン側カシミール)とインド側カシミールとの併合等の構想が含まれる。ただし著者はいずれにしてもまず、インド政府が過去においてカシミールで行った非道な行為を自ら認め、カシミール住民に謝罪することから始めなければならない、と述べている。これまでに住民の間にいかに恐怖と不信が強く浸透しているかを知り、駐留軍を削減し、1989年以降に親や夫を失って孤児や寡婦となった子供や女性たちへの福祉政策を実施し、政治犯を釈放し、蹂躪された人々の傷を癒す、といった一連のプロセスが、インド政府によって始められなければならない、という主張である。

II カシミールの現状をめぐって

著者は序において、自ら強調しようとしている論点として以下の3点をあげている。

第1に、1989～90年におこったカシミール問題の暴力的な展開は、47年以降インド政府がインド側カシミールにおいて民主的な権利や民主的制度を認めない姿勢を続けてきたことに起因するということである。カシミールで1930年代にすでに構想されていた「責任政府」は、70年余を経てなお実現されていない。カシミールの人々が、統治される対象から市民に変わるためには、民主主義をもってくるほかない、と著者は主張するのである。

インド政府の責任を強く批判する観点それ自体は正当なものと考えられるが、しかし1989年以降の展開の原因をもっぱらインドの政策に求めることには異論の余地があろう。本書では一貫して、20世紀末における世界的に過激なイスラミズムの勃興への言及が不足していることは否めない。カシミールが国際的なイスラーム武装勢力の拠点のひとつとなったことが、カシミール問題の性格を大きく変化させたことはすでに多くの論者が共有する見方であり、こ

れを重視しないことには疑問が残る。

第2の論点は、この問題がインドとパキスタンという2つの国家にとって、そしてカシミール人自身にとってどのような意味をもつかである。著者は、カシミール問題は両国にとってはイデオロギーの戦争である、と強調する一方、インド側カシミールの住民の意識は、大別すれば3つに分かれる、とする。まず、プロトタイプのカシミール人意識、つぎにインド人としての意識、最後がパキスタン人としての意識である。著者によれば、第1と第3の意識はAJKにおいても共有される。第1の意識のもとでは、正統な主権単位はインド、パキスタンいずれからも独立したジャンムー・カシミールでなければならない。第2、第3の場合はそれぞれ、インドとパキスタンがジャンムー・カシミール全域を含んだ形で主権単位とならなければならない。

たしかにインドもパキスタンもカシミール問題を自らの存在意義の象徴として利用してきた。インドにとってムスリム多数派地域であるカシミールを自国に含むことは、国是であるセキュラリズムの証しとして重要な意味をもつ。ムスリムの国家という一点で統合を維持してきたパキスタンにとって、ムスリム多数派地域であるカシミールを失うことは、本来脆弱な統合の原理の根幹を揺るがす危険をはらんでいる（1971年に東パキスタンがバングラデシュとして独立したことでパキスタンが受けたダメージはいまだにパキスタンの政治エリートにとってのトラウマである）。しかしここで改めてこうした指摘を強調し、自らの論点として掲げる意味は何であろうか。国家主権をめぐるイデオロギーの対立であるということや、カシミール人の意識にかんする見方自体に、カシミール問題分析としての新しい観点を認めることはできない。

第3はおそらく著者が得意とする他の紛争との比較の観点である。ここで著者は、カシミール問題のような二国間の主権が交錯し、住民が政治的に分裂した状況にある紛争の例は世界にしばしばみられるものであり、特殊なものではないと指摘する。南アジアをいたずらに特殊な政治環境ととらえることを戒める意味でも、比較研究の意義は大きいものと思

われる。

III 残された論点

本書の目次に「主権」(sovereignty)ということばをみたとき、評者はむしろ近年カシミールの主権にかんして、Ayesha JalalやSugata Boseが提示している議論を連想した。その議論では、カシミールにおける主権は二国間のイデオロギー論争という矮小化された形で硬直的に論じられるべきものではない。カシミールはいずれの国に帰属するのか、という問題設定ではなく、中立的な国際機関やインド・パキスタン両国による共同統治という形も含めた柔軟な構想が可能である。さらに主権自体も絶対不変のものではなく、場合によっては主権の切り分けという考え方もあり得る^(注2)。LoCを事実上の国境とすることが政治的現実主義であるという立場もある一方で、むしろあくまでもカシミールを分割されざる一体のものとして考え、その前提に立って創造的なイメージを生み出そうとする姿勢に、評者は強く引かれる。それは本質的なパラダイムの転換を含んだ論点であり、膠着した現実からの飛躍を可能にするからである。本書ではそのようなダイナミックな議論はなく、禁欲的なまでに従来の論点の整理にとどまっている。

つぎに、著者は第4章で、問題解決には、カシミール住民の複合的なアイデンティティーと両国の主権と領土的統一、両方への配慮が必要だと論じている。しかしその両者の両立は具体的にはどのように可能なのか、あきらかにされていない。カシミール住民の一部は第3の当事者として、二国間協議への参加を望んでいるが、それは今のところ実現の見込みがない。

また本書は、あくまでもインド側カシミールにその紛争の舞台としての関心を集中しており、AJKの現状への理解が限定的であることも、全体の印象を従来の枠組みのなかにとどめる要因となっているといえよう。

いわゆるゼロサム式の解決では、このような主権と自決をめぐる紛争を民主的な政治解決に導くこと

は難しいとする著者の指摘には同意する。しかし同時に、著者が提案するような両国政府の歩み寄りの努力や、インド政府とカシミールの関係の改善に期待すること以外、結局は解決への道はない、というのが結論ならば、60年の歴史が積み重ねてきた相互不信と怨嗟を断ち切って紛争からの離脱を始めるためのきっかけとなりうるのはインド側の謝罪である、という指摘ではあまりに弱いだろう。例えば貧困が紛争を助長し、若い世代をテロリズムに走らせているという現実にはどんな対応が考えられるのだろうか。

最後に、インド側において日常的におこっている拷問や女性への暴力は、カシミールの人々の間にインド政府への憎悪を日々増大させているばかりでなく、子供たちをムジャーヒディーンになるよう仕向ける行為にも等しい、と著者は指摘する。人権団体等が常に国際的な監視の目を維持する必要がある、という指摘は正論である。そして、人権運動が監視者としての役割を担うと同時に、われわれ研究者にもまた、研究者としてこうした事態を知り得るなら、研究成果のなかに反映させて世に問うていく責任があるのではなかろうか。

(注1) パキスタン情報部 (ISI) 提供の資料によれば、死者 8 万 1225 人、寡婦 2 万 200 人、孤児 10 万 456 人、拘留中の非戦闘員 (2002 年 10 月現在) 6622 人、破壊された家屋 10 万 2822 棟、強姦被害者 8356 人などとなっている。

(注2) アーイシャ・ジャラル、シュガート・ボースのインタビュー「カシミール問題を解決するために——『領土紛争』から『住民による主権』へ——」(『世界』2003 年 7 月号) を参照。

文献リスト

- Harrison, Selig S. 2001. "Pakistan: The Destabilisation Game." *Le Monde Diplomatique* October (Online Version), (仏語版は "Les liaisons douteuses du Pakistan." *Le Monde Diplomatique* Octobre 2001 <http://www.monde-diplomatique.fr/2001/10/HARRISON/15661>).
- Stern, Jessica 2000. "Pakistan's Jihad Culture." *Foreign Affairs* November/December.

(就実大学人文科学部准教授)